

第2分科会「公共図書館と大学が連携した『認知症にやさしい図書館』事業について」

講師：広島市立中央図書館事業課司書 古田 菜穂子 氏

はじめに

「認知症にやさしい」とは、あらゆる人が認知症について知り、理解することで、認知症の人が「理解されている」「存在価値がある」「地域に貢献することができる」と感じることができる状態を意味している。これは『認知症にやさしい図書館ガイドライン第1版』（2017年）で示されているもので、このガイドラインは「超高齢社会と図書館研究会」のホームページで全文を閲覧できる。



広島市立中央図書館では、「理解を深める」「利用しやすい環境を整える」ことに主眼を置いて、「認知症にやさしい図書館」を目指しサービスに取り組んでいる。ガイドラインには、「認知症にやさしい図書館は、認知症に特化したものではなく、結果的にすべての人にやさしい図書館を意味します。」とあり、そのとおりだと感じている。

講師は闘病記コーナー、参考閲覧室を担当している。今回は「連携のチャンスがあれば掴む」ということを伝えたいと考えている。

1 広島市立中央図書館の紹介

広島市立図書館は、中央図書館とこども図書館、区図書館8館、まんが図書館、2つの閲覧室で構成される。こども図書館があるため、区図書館は児童書もあるが、中央図書館は児童書を置かず一般書のみを扱っている。13館をコンピュータシステムで一体的に運用し、平成18年度から13館一括で指定管理者制度を導入している。現在は、広島市100%出資の公益財団法人広島文化財団が運営する。

蔵書数は児童書を除くと半分以上が中央図書館所蔵となっており、中央図書館が保存館であるということがわかってもらえると思う。

特徴的なコーナーとして、「闘病記コーナー」「ビジネス支援情報コーナー」「3大プロコーナー」「多文化サービスコーナー」を設置している。多文化サービスコーナーはハングルや中国語資料、3大プロコーナーは広島交響楽団・サンフレッチェ広島・広島東洋カープに関する資料を設置している。また、移動図書館車「ともはと号」の巡回や公民館への配本も行っている。

2 闘病記コーナーの紹介

闘病記コーナーは2006年に開設した。闘病記資料のミニ展示をするために所蔵資料を集めたところ100冊以上が集まったことから、常設することになった。担当者2名で約600冊を選び

開設した。

2009年には「闘病記コーナー開設2周年記念事業」企画展を館内にある展示ホールを使用して実施し、患者会の会報やパンフレットを展示・配布した。

2012年には「がんと暮らす情報コーナー」を設置し、2014年から国立がん研究センター発行の「がんの冊子」の寄贈を受けている。

2016年には「闘病記コーナー開設10周年記念事業」企画展を機に、「闘病記」だけでなく「健康・医療・介護」情報サービスを行うことを位置づけた。同年、広島市内の国指定がん診療連携拠点病院と相互にパンフレットを置く連携を開始した。

闘病記コーナー、患者会などの情報コーナー、がんと暮らす情報コーナー、健康・医療に関する雑誌、健康・医療関係の資料、介護関係の資料、展示「認知症にやさしい図書館」を2階に設置しており、健康・医療関係資料のうち参考図書は3階にあり分かれている。

3 「認知症にやさしい図書館」を実施するまで

2015年の「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」（2017年改訂）を厚生労働省が策定した後の2017年1月に資料40冊ほどを並べたミニ展示「認知症を知る」を開催した。2017年10月の第103回全国図書館大会で、「超高齢社会と図書館研究会」が「認知症にやさしい図書館ガイドライン」を発表した後の2018年には、市立図書館職員対象の「認知症サポーター」養成講座を実施した。ガイドライン発表が認知症にやさしい図書館への取り組みを考えるきっかけになったと感じている。

2017年から2019年にかけて、広島市域を中心とした公共図書館14館、映像文化ライブラリーと大学図書館17館が、同一テーマで事業を実施する「Hiroshima Active Library 協働事業」を実施した。2017年のテーマは「障害の理解」で、公共図書館では読書支援機器の体験会や展示を行い、広島都市学園大学は講演会「映画から学ぶ認知症」と展示「認知症のケアと予防」（大学附属図書館内）を実施した。展示は、健康科学部リハビリテーション学科専攻教授と大学図書館司書、学生によるもので卒業研究のテーマとして実施した。講演会会場が中央図書館併設施設だったことから、大学から図書館での展示打診があり、展示「認知症にやさしい図書館」とこれに伴う利用者アンケートを実施した。これをきっかけに以降連携するようになった。

4 「認知症にやさしい図書館」事業の実施内容

第1回（2018年3月）は、50冊の図書展示「認知症にやさしい図書館～認知症予防と支援～」と講座「認知症を知る～本を選ぶポイント～」を実施した。講座では、適切な情報に早くたどり着くために大切なこととして認知症のタイプを知ることがを挙げ、アルツハイマー型・レビー小体型認知症に焦点をあてて紹介された。認知症についての動画をまじえた説明のほか、認知症に関する本、イギリスの先進事例の紹介もあり、分かりやすい内容だった。

展示の展開方法について、次のとおり分担している。本の選択やPOP作成を学生、解説パネルを大学の教授、リスト作成を大学附属図書館司書、チラシ作成を中央図書館が担い、広報は双方で行い、広島市広報紙掲載やラジオでの紹介を実施した。

連携の利点として、展示は、POPによる華やかさがあること・選書に専門家の意見が入るこ

と、講座は、専門家の話を聞くことができること、具体的な話が聞けることがある。

第2回（2018年度）、第3回（2019年度）もそれぞれ展示、講座を実施した。

2019年11月には、絵本の読み聞かせ、ブックトーク、新聞紙を使った棒を使った体操を行う「認知症ブックカフェ」も開始した。

認知症ブックカフェは、図書館の本を活用して実施しており、参加者は当事者と家族に限定せず、関心のある人も参加可能とすることで、参加者同士・参加者と学生の交流の機会ともなるように展開している。

連携したことで「参加者が話したい、教えてあげたい気持ちになる点」「専門家を目指して学んだ学生が話を聞いてくれる点」が良かったと感じている。



第4回（2020年度）は、展示「認知症にやさしい図書館～住まいと暮らしの工夫～」と講座「認知症を知る～住まいと暮らしの工夫～」を実施し、講師の作業療法士としての実体験をまじえながら、「炊飯器の複数あるボタンのうち使うもの以外を隠して1つだけ見えるようにする」等、その人らしい生活を維持できる住環境と生活の工夫について講義してもらった。

2021年度の第5回展示・講座・認知症ブックカフェでは、広島大学医学部との連携も開始した。展示「認知症にやさしい図書館～小説でふれる内面世界」は、前回までゼミの学生が行っていた本の選択やPOP作成を、大学の図書館サークルの学生が行うようになった。この回の認知症ブックカフェでは、絵本の読み聞かせと解説、本の紹介、懐かしい写真や図書館の本を見ながら思い出を振り返り語り合う取り組みを行った。話しかけられたくない人もおりギクシャクする場面があったが、年長学生の上手な声かけがあり良い雰囲気となったことも印象的だった。

第6回（2022年度）も、展示、講座、認知症ブックカフェを実施した。認知症ブックカフェでは、10月は2021年度と同様の内容、11月は新しいテーマ「図書館で作業療法」を実施した。当事者に「してもらう」のではなく「してあげる」立場の経験をしてほしいという思いで、本の表面の簡単な清掃作業や図書館配布資料の折り作業といった4種の作業を用意し実施した。参加者の募集を認知症の方限定としたため申込数が少なく、地域包括ケア推進課・地域支えあい課や包括支援センター、市の認知症カフェ運営団体などに働きかけたが、参加者が少なく当事者参加の難しさを感じた回だった。2023年度6月の認知症ブックカフェは、対象者を限定せず実施した。

職員へ当事業の評価アンケートを実施した年があり、「認知症に関する本の問合せが増えてきた」「認知症に関わる仕事の人の利用が増えた」「認知症に関する職員の認識が高まった」「職員が認知症に関する知識を習得する必要性を感じた」という声がよせられ、2019年の資料案内の改善につながった。具体的には、4桁分類「精神医学(493.7)」で混配していた「認知症(493.758)」

を6桁分類へ変更し認知症の本だけが集まるようにしたほか、493.758「認知症」と看護・建築・社会保障などの「認知症」に関する本の背にカラーラベルの貼付、配架場所の案内表示を行った。

大学に連携して良かった点を聞くと、参加学生からは「役に立っている実感を得た」「本の持つ力を感じた」「『本当にありがとう』と感謝され、また経験したい。」「他大学学生と交流ができる」、教員からは「授業を受ける姿勢が変わってきた」「地域の高齢者を知る機会になった」「大学のPRになる」といった声がよせられた。

また、図書館としても、連携により「専門家の意見が聞ける」「最先端の情報を知ることができる」「認知症当事者の実際を知ることができる」「事業の幅を広げることができる」「多世代交流の場が提供できる。学生の力を借りることができる」「現場で役立つ本の選定ができる」ことが良かったと感じている。

連携するためには図書館のメリットを伝えることが必要だと考える。具体的には、「幅広い年代の人が来館する」「認知症に関心のない人も来館している」「資料がある」「資料を提供する司書がいる」「レファレンスサービスが利用できる」「安心感・信頼感がある」「広くチラシ配布・広報ができる」ことが挙げられる。

5 課題と今後の展開

課題・できなかったこととして、認知症ブックカフェの定期開催や認知症当事者によるボランティア活動、飲料の提供、認知症と診断されたときに手渡せるブックリスト作成を挙げる。ブックカフェの定期開催は、学生には試験等があること、ブックリスト作成は、教員らの負担が大きいということから、実施が難しかった。連携するためにお互いを理解しあい、無理をせず継続していくことが大切だと感じている。また、良かったことと目標を共有することも、やりがいにつながり、お互いに喜びがあることが大事だと感じる。

2023年も認知症ブックカフェと展示を予定している。ブックカフェでは、地域包括支援センターの協力を得て「認知症サポーター養成講座」を実施予定である。このセンターとの連携は過年度の参加者募集の働きかけがきっかけとなった。

現在は、社会福祉協議会等との連携を広げていく、認知症ブックカフェ対象を中高生へ広げるなどの中期的視点をふまえた3か年計画を立てたところである。

「認知症施策推進大綱」(2019年)をみると「共生」と「予防」がキーワードになると思う。今年6月には認知症基本法が成立し、認知症に関する正しい知識及び認知症の人に関する正しい理解を深めること、認知症の人の社会参加の機会確保が明記されている。これらをみると図書館でもできることがあると思う。

今後の目標としては、認知症についての情報を得られる場所となること、困ったときに相談できる場所(情報)につながるができること、認知症になっても安心して過ごせる場になること、社会参加の場、多世代交流の場になることを挙げたいと思う。

私たち司書自身が認知症への理解を深める事が重要であり、今後も継続して専門機関と連携して図書館サービスのあり方を進化させていく必要があると考えている。地域に暮らす人々が共に支えあう「地域共生社会」を目指して、「認知症」の人にやさしいだけでなく、全ての人に

「やさしい」図書館となるように模索していきたいと思う。

6 グループワーク

参加者らが5グループに分かれ、自館で行っている、あるいは今後取り組みたいと思う連携の取り組み（認知症以外も可）について話し合い、最後に発表を行った。各グループ発表で共有した各館の取り組みの概要は以下のとおり。

(1) Aグループ

岩見沢市立図書館：保健センターとの連携でもの忘れ相談会を実施している。初めての試みで発展途上。

旭川市中央図書館：市役所からの依頼で認知症の展示等を実施
図書館事業やイベントでの教育大との連携
市立大学の幼児教育学科の学生が図書館でイベントを行う取り組み

滝上町図書館：高校生と連携し事業を実施していたが、学校の統廃合によりなくなってしまった。現在はOB・OGがボランティアサークルを作り図書館事業の手伝いをしてきている

その他：ウポポイの学芸員との連携による図書館職員の資質向上事業の紹介があった（北海道図書館研究会より）。

(2) Bグループ

興部町立図書館：昆虫同好会の協力を得て移動昆虫教室等を実施

北見市立留辺蘂図書館：地域包括センターから打診があり高齢者施設の作品展示実施予定
高校生によるパネル展
高齢者バンド演奏の連携の取り組み
館内展示の際のタイトルを幼稚園児の貼り絵で作成

(3) Cグループ

市立名寄図書館：闘病記コーナーを設置、市立大学と連携し学生とイベントを企画

苫小牧市立中央図書館：アイスホッケーチームとの連携

(4) Dグループ

大空町東藻琴図書館：地域包括センターから認知症カフェのチラシ提供が初めてあったことから今後連携につなげたいと感じている

その他：地元の図書館で高齢者施設での読み聞かせを実施している（図書館ボランティアの一般参加者より）。

(5) Eグループ

当別町図書館：医療大学と協定を結び、大学の専門図書を図書館に置き、貸出す取組を行っている。今後、包括支援センターと連携し認知症啓発展示を実施予定。

7 まとめ

「連携は、始めることが一番大変かと思うが、軌道に乗るまで前向きに取り組んでほしい」とのメッセージで締めくくった。